

News Release

直近の農作業事故の発生要因や事故傾向について分析

~ 最新の共済金支払データによる分析結果を公表 ~

JA共済連(全国共済農業協同組合連合会・代表理事理事長:柳井 二三夫)は、農業者が安心して農業に従事できるよう保障提供とともに、農作業事故の未然防止に向けた活動を展開しています。この度改めて、平成29年から令和2年までの最新の共済金支払データ2万1,634件を用いて、直近の農作業事故の発生要因や事故傾向について分析を実施しましたので、ご報告します。

分析結果に基づくと農作業事故は年間7万件程発生していると推測され、事故の発生状況では、乗用トラクタの発生頻度が高く、農用運搬機の重症度が高いことが明らかとなりました。一方で、「農用運搬機」については、発生頻度は後述の前回調査から減少しているものの、重傷度については著しく上昇しており、重大事故につながりやすい傾向にあることなどが直近のデータにより明らかとなりました。

農林水産省の調査によると、農作業事故における危険性は高く、特に死亡事故の発生割合については、建設業の約3倍、全産業の10倍以上と高いことから、農林水産省は令和4年までに死亡事故の件数を平成29年の水準から半減させることを目標に掲げて、農作業安全対策に取り組んでいます。

JA共済連においても、引き続き、本会独自の共済金支払データを活用しながら、行政機関や関連 諸団体と連携を図り、農作業事故の未然防止に向けた活動を展開してまいります。

農作業事故の発生状況の分析について

分析および結果の詳細については、別添1をご参照ください。

(JA共済ホームページ (https://www.ja-kyosai.or.jp/) より、ニュースリリースのページにて 分析結果の「概要版」、「詳細版」をご覧いただけます。)

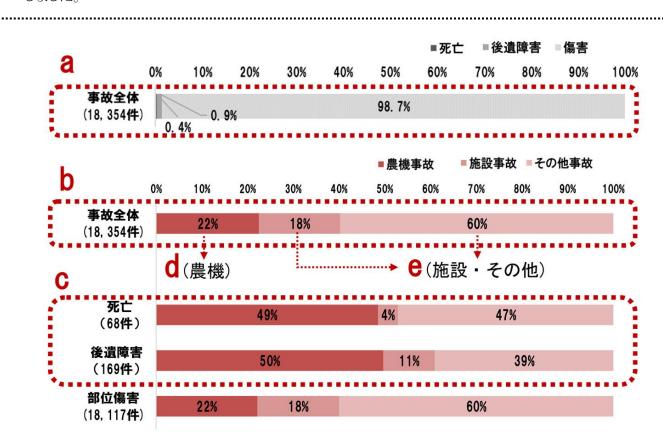
これまでの取組み

JA共済連では、平成30年に過去4年間(平成25年から平成28年)に蓄積した共済金支払データを活用して、農作業事故の発生要因や事故傾向について分析、農作業事故の実態、およびリスクをとりまとめて公表しています。

前回調査時のデータとの比較については、 別添2をご参照ください。

分析①(概要) 農作業事故全体における死亡、および重傷度について

- ▶ 毎年、農林水産省から死亡事故の調査結果が公表されており、令和2年度の死亡件数は270件でした。
- ➤ JA共済の共済金支払データを分析したところ、事故全体(18,354件)のうち、死亡事故は0.4%であることから、農作業事故は年間約7万件発生していると推測されます。
- ▶ JA共済連では、今回、死亡にいたらなかった事故を含めて、より広範囲の農作業事故の実態を明らかにしました。

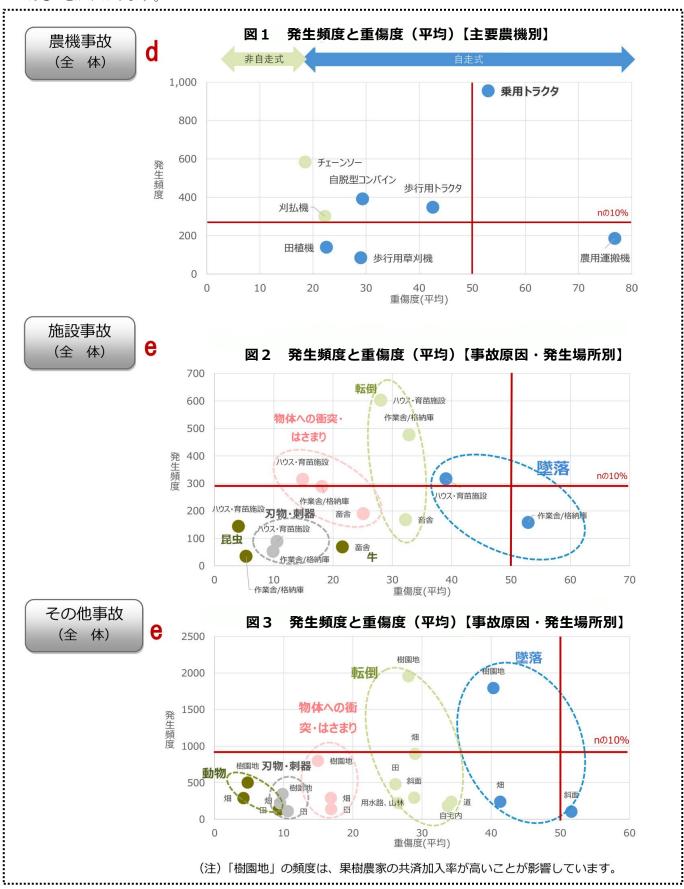


着眼点	まとめ		
a:傷害の程度別	死亡:後遺障害:傷害= 1 :2:266	死亡事故は極一部	
b:事故全体	農機:施設:その他=3:2:8	「その他事故」が多い	
c: 重大事故	農機:施設:その他=7:1:6	「農機事故」が多い	
d:農機事故	「乗用トラクター」については「発生頻度」および「重傷度」 のいずれの観点からも危険性が高い(図1)		
e:施設・その他事故	施設内外を問わず、「 墜落」 の場合に重大事故につながり易く、 高所作業や急な斜面には注意が必要(図2、3)		

(注)「重傷度」はJA共済連が独自に算出した指標です。

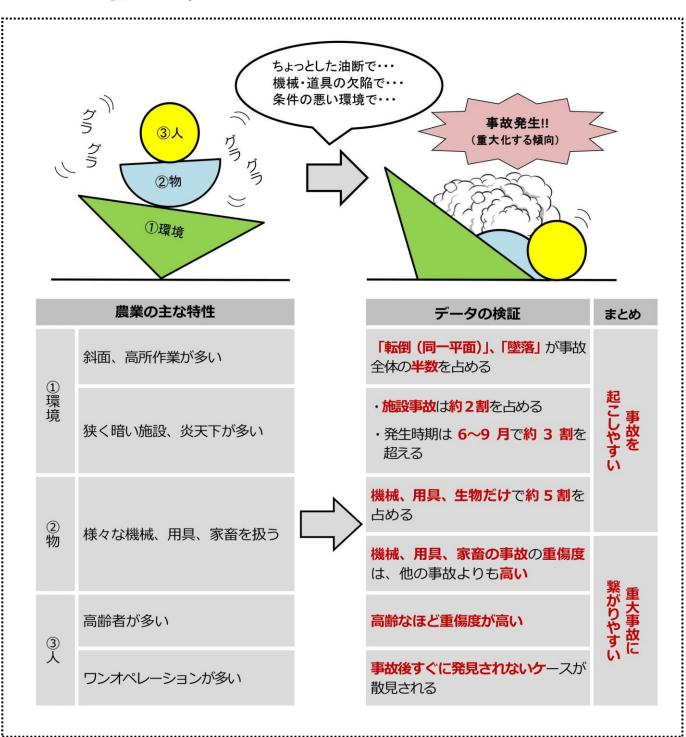
※ 表中(図1)、(図2、3)は次頁リスクマップに対応しています。

- ▶ 「農機事故(全体)」、「施設事故」、「その他事故(全体)」について、それぞれの発生頻度と重症度(平均)を縦横に配してリスクマップを作成しました。
- ▶ 主要農機別の農機事故 → 乗用トラクタは、「発生頻度」および「重症度」の双方の観点から危険性が高いことがわかります。
- 事故原因・発生場所別 → 施設内外に関わらず、「墜落」の場合に重大事故につながりやすい傾向であることがわかります。



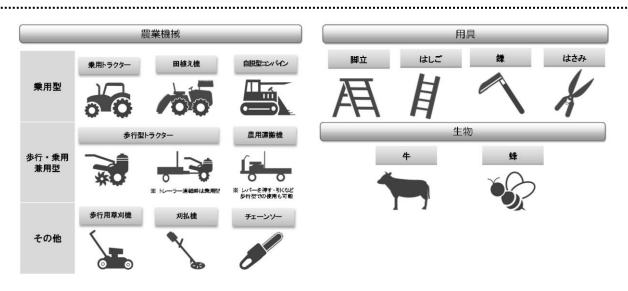
分析②(概要) 農作業の特性と事故の関係

農作業事故はなぜ起こり、また、なぜ重大化する傾向があるのか、一般的な農作業の特性と事故の関係をデータから検証しました。



分析③(概要) 主な農機・用具・生物の事故特性

▶ 主な農機・用具・生物(合計14種)について、それぞれの事故特性を明らかにしました。



事故特性のまとめ

:「乗用型」使用時の「公道・圃場での転落・横転・衝突」

: 「乗用型」使用時の「乗降中の人の転倒」

:「歩行型」使用時の「下敷き・巻き込まれ・構造物と機械に挟まれ」

:「刈払機・はしご・脚立」使用時の「(不安定な場所からの) 転落・墜落」

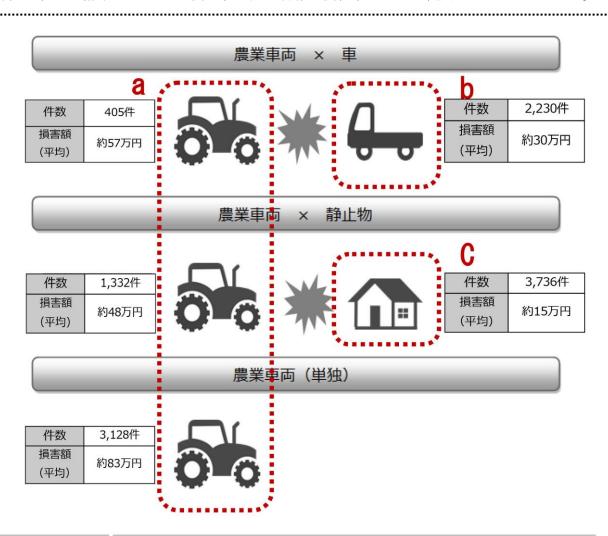
:「刃のある機具」使用時の「巻き込まれ・刃との接触」

		発生件数 多	発生件数 多	発生件数 少
		重傷度 高	重傷度 低	重傷度高
乗用型	乗用トラクター	前進(圃場)-転落・横転	作業機連結ーその他の接触	直進(公私道)-転落・横転
		_	乗降中一転倒のみ	作業機ー構造物と機械に挟まれ
			点検・手入れーその他の接触	周辺作業-巻き込まれ
	田植え機	_	乗降・苗交換中-転倒(のみ)	直進(公私道)-転落・横転
	自脱型コンバイン	_	点検・手入れーその他の接触	直進(公私道)-転落・横転
			周辺作業中一巻き込まれ	
兼用型	歩行型トラクター	後進(圃場) -構造物と機械に挟まれ	—:	前進(圃場)一転倒のみ
		後進(圃場)-巻き込まれ	-	前進(圃場)-巻き込まれ
	農用運搬機	_	_	後進(圃場)-転落・横転
				前進(圃場)一下敷き
	歩行用草刈機	前進一転落・横転	前進-飛散物跳ね上げ	前進一構造物に接触
		-	-	旋回一転落・横転
その他	刈払機	-	前進-巻き込まれ	前進-転落・横転
			前進-飛散物跳ね上げ	
	チェーンソー	_	立木切断 – 巻き込まれ	立木切断-接触
			剪定-巻き込まれ	_
	脚立	樹園地 – 墜落	樹園地 – 踏み外し	ハウスー踏み外し
		_	_	樹園地一脚立の広がり
	はしご	樹園地 – 墜落	_	作業舎/格納庫-墜落
用具		樹園地-踏み外し		作業舎/格納庫-踏み外し
	鎌	_	畑ー刃部との接触	_
			田一刃部との接触	
	はさみ	-	樹園地一刃部との接触	-
生き物	#	_	畜舎ーその他のぶつかり	_
			畜舎ー構造物と牛に挟まれ	
物	蜂		樹園地 – 刺され	
- Vernand			畑-刺され	

(注)「発生状況 (~するとき)」と「結果 (~になった)」の組み合わせからなる「事故の型」について、発生件数が事故データの 10% 超の場合 (「事故の型」が多様な乗用・歩行用トラクターでは5%超) に「発生件数 多」と判定し、重傷度 (平均) が50超 (重傷度が比較的低い用具・生物では30超) の場合に「重傷度 高」と判定しています。

分析④(概要) 物損事故の発生状況

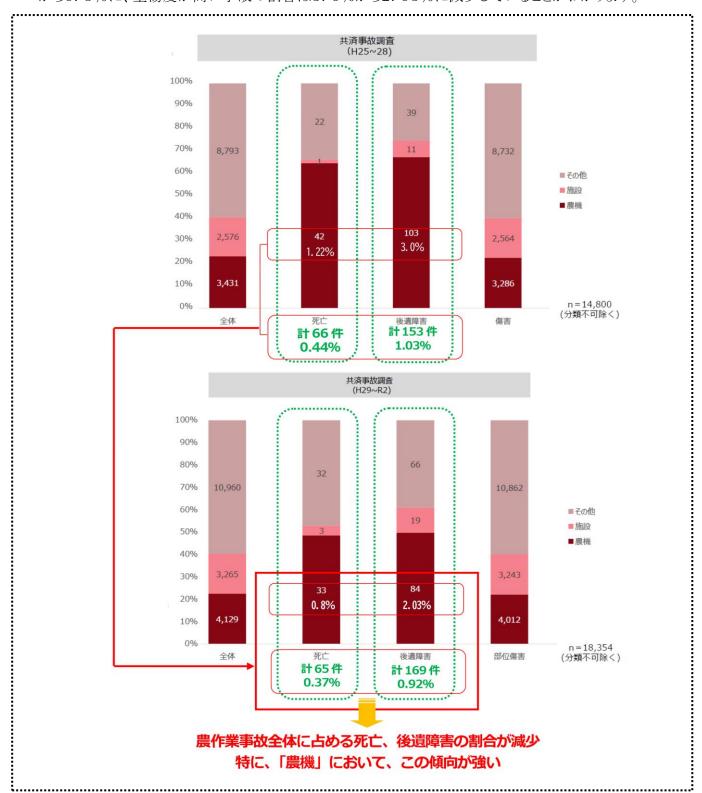
▶ 傷害事故の予備軍ともいえる物損事故の発生件数と損害額について、傾向を明らかにしました。



着眼点	まとめ	
a:自車両	・件数および損害額(平均)は、「農業車両(単独)」の形態で最も高い ・特に「転倒・転落」については「発生頻度」および「損害額」のいず れの観点からも危険性が大きい	
b:相手方車両	損害額(平均)は、それほど高くはないが、実際にはこのほか相手方の 人身傷害にかかる損害賠償を過失割合に応じて請求されることが一般的	
c:静止物	・損害額(平均)は、低い ・特に「壁」および「給水・排水設備」に衝突することが多い	

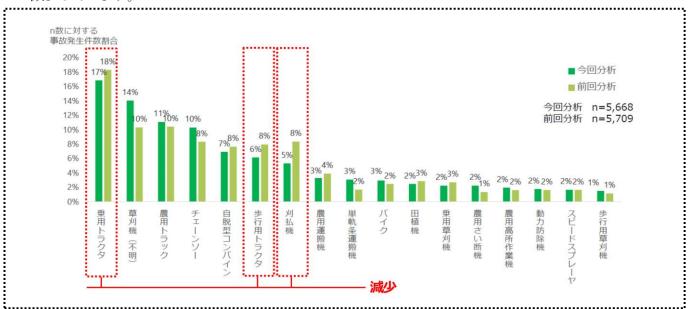
前回データとの比較① 死亡、および重傷度の比較

- 共済金支払データを基に前回(平成25年~28年)までの調査(以下、前回調査)と、今回(平成29年~令和2年)までの調査(以下、今回調査)を比較すると、農作業事故における全体的な傾向に差はなく、 農機使用中の農作業時に死亡・後遺障害などの重傷度の高い事故が発生しています。
- ▶ 一方で、農作業事故全体に占める死亡事故の割合を見ると、前回調査の0.44%に対して、今回は0.3 7%に、また後遺障害を伴うような重傷度の高い事故の割合は、1.03%から0.92%に減少しました。
- ➤ これを「農機」、「施設内」、「その他(屋外)」に分類すると、特に「農機」においては、死亡割合は1.22%から0.8%に、重傷度が高い事故の割合は3.0%から2.03%に減少していることがわかります。



前回データとの比較② 農機別に見た事故発生件数の割合

- ▶ 農機使用中に発生した事故を農機別に見ると、「乗用トラクタ」、「草刈機(不明)」、「農用トラック」が上位を占め、以下、発生割合が5%を超えるものに「チェーンソー」、「自脱型コンバイン」、「歩行用トラクタ」、「刈払機」が続きました。
- ▶ 前回調査と比較すると、トラクタ(下表中の「乗用トラクタ」、「歩行用トラクタ」)、および「刈払機」の割合が減少しています。



※草刈機(不明)は刈払機、乗用型草刈機、歩行型草刈機の判断のつかない機械を指す。

前回データとの比較③ 農機別に見た事故発生件数の割合

- ➤ 主要な農機をリスクマップを用いて前回調査と比較すると、「乗用トラクタ」は発生頻度、重傷度とも減少し、「歩行用トラクタ」と「刈払機」は発生頻度が減少していることがわかりました。
- ▶ 一方で、「農用運搬機」については、発生頻度は前回調査から減少しているものの、重傷度については 著しく上昇しており、重大事故につながりやすい傾向にあることが明らかとなりました。

